

## 米国・教会と交流 被爆地児童

## 映画制作協力呼びかけ

重藤さん

原爆投下から2年後、被爆地の小学生と米国の教会が交流を深めた実話を基にした記録映画「ヒロシマの校庭から届いた絵 希望の種」の制作を進める、米国在住の舞台芸術家、重藤マナレ(静美さん)(56)が17日、広島市を訪れた。

1947年、爆心地近くの本川小(広島市中区)に、紙や2色のクレヨンが贈られた。米国のオールソウルズ教会が寄付を募ったものだった。児童たちは翌年、返礼として絵や習字などを教会に贈った。

絵はその後、半ば忘れら



絵を描いた元児童らと語り合う重藤さん(右)(広島市中区で)

れていたが、重藤さんは2006年にその存在を知った。「どんな惨状が描かれているのか」。だが、どの絵も桜並木や着物姿の女の子など、美しい絵ばかり。子どもたちが描いた「夢」に心を揺さぶられた重藤さんは、絵の修復活動と共に、交流の事実を広く伝えるため、映画制作に乗り出した。

重藤さんは07年に来日し、当時の児童たちのインタビューを収録。11年の完成を目指して制作を進め、絵の里帰りも計画している。

重藤さんは17日、広島平和記念資料館で元児童ら約40人と会い、映画への協力を呼びかけ、「絵とその背景の物語を伝え、再び原爆

の被害が起きないよう訴えたい」と話した。